

# 読賣新聞

2010年(平成22年)

3月2日 火曜日

2月27日に南米チリを襲ったマグニチュード(M)8.8の大地震。エネルギー量では1月のハイチ大地震(M7)の500倍にも達するが、死者数では、ハイチ地震の約23万人に対し、チリは708人(1日現在)。海外各紙は、中南米で起きた二つの地震で被害状況が大きく異なったことに注目し、背景を探る比較や分析をこぞって報じている。

まず挙げられたのが、二つの地震の「質の違い」。

## 「死者23万」ハイチとの差は？

米ロサンゼルス・タイムズ(2月28日付)は、「ハイチでは震源が浅く、地震が起きたのも人口が密集する首都近くだった。チリでは震源が沖合で深く、沿岸地域は比較的人口もまばらだった」と指摘した。

英フィナンシャル・タイムズ(3月1日付)は、1960年のM9.5の大地震以降も、ハイチ大地震と同規模のM7程度の地震が少なくとも十数回発生している点に着目。「チリの建築基準法は(耐震基準が)中南米で最も厳しく、建築物はきわめて頑丈だ」との専門家の言葉を引用し、新築の際には第三者機関の検査を義務付けるなどの基準法があったため、ハイチのように首都で建物が軒並み崩壊する事態は避けられた。(国際部 中島慎一郎)

## 異なる地震の質 ■ 厳しい耐震基準奏功

この見方を示した。

AP通信(2月28日配信)

は、「チリのパチエレ大統領は地震直後から状況を一刻一刻発表した。一方、ハイチでは地震発生から一夜明けるとまで、国民の多くが大統領が生きているかどうかさえわからない状態だった」と述べ、政府による対応の違いも際立っていたと指摘した。

